**２０１４年　元旦礼拝プログラム**

司式者　小鹿野輝芳兄

説教者　郷家一二三師

奏楽者　郷家　清子師

　　　　　　　中善寺文子姉

前　　奏

招　　詞

頌　　栄　　たたえまつれ　　　　　　　　　旧聖歌８９番　　　　一　同

使徒信条　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一　同

讃　　美　　聖なる　聖なる　　　　　　　 新聖歌１３７番　 　一　同

交読詩篇　 第３８　詩篇第１２１篇 　　　　　　　　　　　　　一　同

祈　　り　　代表の祈りに続いて　主の祈り 　　　 　　　 小池淳一兄

十　　戒　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一　同

讃　　美　 御霊(みたま)は天より　　 　　新聖歌１３５番 　　　一　同

報　　告

聖書朗読　　ローマ書第８章１５－１７節　　　　　　　　　　　　司式者

　説　　教 　「神の子たる霊を受け『アバ、父よ』と叫ぼう」　　　郷家師

　感謝献金　 神の御子にますイエス　　　　 新聖歌３９７番 　 一　同

　献金唱　　 このささげものは 主よ　ながものなり

賜りしものを　返したてまつる　アーメン 　　　　 一　同

　感謝祈祷　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 大岡俊雄兄

　頌　　栄　　父なる神 み子なるイエス　 聖きみ霊(たま)の

ひとりの神に　み栄えあれ　 アーメン　　　 　　　一　同

　祝　　祷　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　 郷家師

　後　　奏

 お願い

今年は坂戸キリスト教会創立６０周年の年です。元旦礼拝後に全員の方々で

写真撮影を行います。写真は２階バルコニーから撮ります。指示に従って移動してください。よろしくお願いいたします。

2014年元旦礼拝説教要旨

**元旦礼拝の意味**

１年の最初の１日を大切にして祝う習慣は国と文化を越えて世界中に見られます。新しい年に対する思いを整えて、新しい一歩を踏み出そうとする。その最初に元旦礼拝を持つことは、わたしたちの人生の節目を刻む、大切な時です。聖書に「これを年の正月とする」(旧約聖書　出エジプト記第１２章２節)とあります。自動的に正月が来たから正月を祝うのではなく、神が定めて下さった日を「正月とする」ように命じられています。新しい年の初めに「神への服従と決意を新しく表わす礼拝」をささげて、正月を正月とする。まことの神への礼拝こそ、あたらし年の初めにふさわしく、わたしたちが礼拝する神は、天地万物を創造された父なる神、救い主イエス・キリスト、そして愛と命とを与え続ける聖霊なる神です。拝む心が大切で、どこで何を拝もうと、願い事をすることに意味があると多くの人は思います。はたしてそうでしょうか。いま、この元旦の中心は、わたしたちの思い以上に、わたしたちが礼拝する神なのです。

**元旦礼拝の　新約聖書ローマ人への手紙第８章１５－１７節**

神はわたしたちに呼びかけられます。２０１４年も、毎週、主イエス・キリストがよみがえられたことを記念して、「主の日」の礼拝を続けます。神の語りかけてくださる言葉を、この礼拝堂で仲間と共に聴き続けます。この礼拝に与えられている言葉を聞きましょう。

**「あなたがたは再び恐れをいだかせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。 御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。 もし子であれば相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人なのである。」**

最近の新聞で、日本の２０歳代の８０パーセントが将来の生活に期待よりも不安を感じていると報道されていました。漠然とした不安や恐れを野放しにしないで、その原因と実体を聖書からしっかりと見極めなければなりません。ここでは、再び恐れを抱かせる奴隷の霊を受けて生きているのではない。神の子どもという新しい身分を保証する霊を受けて生きている、とはっきり宣言します。あなたは神の子です。主イエス・キリストは、罪と裁きから救い出してくださり、あなたを神の子として下さったのです。１２月に３人の方が洗礼を受けられました。洗礼のたびごとに喜びがあふれました。天において大きな喜びがあり、地において立ち会った子どもから大人まで大きな喜びがありました。洗礼は神の子としての誕生です。もう裁きとしての死の恐れは無くなりました。繰り返し繰り返し、お前はまだダメだ、ひとつもできていないではないか、と責め立てられ、不安と恐れに陥れられることから解放されました。７年前に、この洗礼槽で洗礼をうけた少女が、水からあがった直後に、「おしまい。」と、大きな声で叫びました。会堂に響いた声は私の耳に今も残っています。そしてわたしを慰めてくれる言葉です。「おしまい。」そうです。神はおしまいにしてくださったのです。再び恐れをいだかせる奴隷としての生活は「おしまい｣。今はもう、主イエス・キリストによって、あなたがたは神の子。古い自分は、もう、おしまい。あなたがたは神に愛されている神の王子、神の王女。プリンス、プリンセス。

神の子とされたなら、洗礼のあとも、継続して、神の霊である聖霊の働きかけを受けることができます。聖霊なる神がわたしたちに働きかけて下さる、その具体的な、そして日々の確かな体験がここに記されています。**その霊によって、わたしたちは「アバ、父よ」と呼ぶのである。 御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。**

神はわたしたちを呼んで下さる方です。わたしたちも神を呼ぶことのできる者です。「天の父なる神」「天のお父様」「主よ」「恵み深い天の父なる神さま」。わたしたちは神の子とさたので、神をいろいろな呼びかたで呼ぶことがゆるされています。でも、なかなか呼べない思いになり、どう祈っていいのか分からない時が多いのではないでしょうか。その言葉にならない祈り、神への呼びかけの最初の言葉、「アバ、父よ」、「おとうさん」と呼ぶ言葉をわたしたちに与えて呼ばせて下さるのです。これこそ聖霊の働きかけです。

そしてその一つの言葉、神を呼ぶ言葉がわたしたちの口から出た時に、わたしたちの霊の中に聖霊は働かれて、「あなたは神の子である」と確かな保証、平安を与えて下さるのです。

**２０１４年に掲げた聖書のことば**

わたしたちはこの年に、この聖書が語るように、**「キリストと栄光を共にするために苦難をも共にしている以上、キリストと共同の相続人」**として、一緒に歩んで行きます。地上を旅する礼拝の民、神の家族・ファミリーとして、多くの人々に仕え、また仕えられ、互いに助け合って進んでいきます。もう、将来に漠然とした不安を抱くことはありません。父なる神を呼びながら、主イエス・キリストと共に、聖霊に支えていただきながらの旅だからです。その旅の羅針盤は聖書です。この旅は、主イエス・キリストと共に「栄光と苦難を共にする」共同の旅です。

２０１４年がどのような年になるかは誰も正確にはわかりません。経済の先行き、わたしたちの生活の厳しさ、国際的な関係のこじれ、政治家の独善的な判断と行動、頻発する自然の災害。この年もわたしたちを動揺させる事が続いても、揺るがない神の言葉の約束に土台を置いて、２０１４年を歩み出し、礼拝する民として一緒に旅を続けていく。「栄光と苦難を共にする」共同の旅が続きます。二つの御言葉を、会堂の正面に掲げました。

**みことばの戸が開くと、光が差し込み、**

**わきまえのない者に悟りを与えます。　　　　詩篇119篇130節**

**神がすべてのことを働かせて益としてくださることを**

**私たちは知っています。　　　　　　　　　　ローマ書8章28節**

詩篇１１９編の御言葉は、聖書のすべての言葉について、神の言葉とはどういうものかを語っています。わたしたちが聖書の言葉の前に立つとき、それが静かに思いめぐらしている礼拝やディボーションの時であっても、また忙しく動いている時であっても、言葉のほうが光を放ち、わたしたちを照らすのです。最初はいったいこの言葉は何をわたしに語ろうとしているのだろうかと思う。なかなか開かれないときが続きます。でも聖書の言葉をじっと心に抱いて、思いめぐらしながら生活していると、言葉のほうが光を放ってくるのです。実に意外なときに、ああそうか、と開かれている。

パウロのダマスコに向かう途中の出来事は、まさにそうでした。主イエス・キリストのほうから現われてくださったのです。パウロの心の中に深くあった思い、キリスト者を迫害しつつも本当にこれでいいのかと思う思いに、神が光をあててくださったのです。彼はいったん全く見えなくなり、また目から鱗のようなものが落ちて見えるようになりました。

聖書のすべての言葉が、これを語ってくださる主イエス・キリストが、わたしたちを訪問して下さり、語りかけてくださる言葉なのです。

ローマ書の言葉は、全部うまく行く、というように受け取れます。正月の言葉としてまことにいい言葉だと思いやすいのですが、「すべてのことを働かせて益としてくださる」とは、わたしたちが考える益ではないのです。ともすると自分たちだけが益となればいい、世界中で日本だけがよくなればいい、周辺の国々との関係など面倒であり他の国は自由にやればいい、そう考える益は非常に危険なのです。益を求めるどころか、全てを破壊してしまいます。

神が益とお考えになるような益に、わたしたちを導いてくださいます。神は全てを働かせて、あらゆる事々を動員され、結びつけ、奪ったり排除したり憎しみあったり批判しあったりして自分中心の益ではなく、神の益へと導かれます。アバ父よ、と神を呼びつつ、信頼の第一歩を、この礼拝から踏み出します。